

8301 或る秋の午後、私は、小さな沼が・・・

或る秋の午後、私は、小さな沼がそれを町から完全に隔離している、O夫人の別荘を訪れたのであった。

その別荘に達するには、池のまわりを迂回している一本の小径によるほかないので、その建物が沼に落としている影とともに、たえず私の目の先にありながら、私はなかなかそれに達することが出来なかった。

堀 辰雄『窓』

[許容訳例]

On an autumn afternoon, I visited Mrs. O's villa, which a small marsh isolated completely from the town. The only way to get to the villa was to go around the marsh by a path. The building with the shadow it threw on the marsh was continuously in sight, but it was not at all easy to reach it.

[翻訳例]

One autumn afternoon, I went to call at Mrs. O's country villa, which a small marsh isolated completely from the town. To get to the villa, one was obliged to rely on a narrow path that made a detour around the marsh, so that although the building, together with the reflection it cast onto the marsh, was constantly before my eyes, it was no easy matter to reach it.

■或る秋の午後、私は、小さな沼がそれを町から完全に隔離している、O夫人の別荘を訪れたのであった。(8301)

★「或る秋の午後」は On an autumn afternoon でもいいかもしれませんが、英語の表現としては One autumn afternoon か One afternoon in (the) autumn が普通です。なお、アメリカで「秋」に fall を使いますが、One afternoon in (the) fall とは言えるでしょうが、One fall afternoon という言い方を普通するかどうか、確かめてみないと危ないです。

★「小さな沼」は a small marsh でしょう。

★「町から完全に隔離している・・・」は、普通だったら英語らしい表現にするために受動態にして be isolated completely from the town by…としますが、あえてこの場合はそうしないで、「小さな沼がそれを町から完全に隔離している、O夫人の別荘」という日本語の堅さと同じように…a small marsh isolated … completely from the town としてよいと思います。

★「O夫人の別荘」の「別荘」は対応が難しい言葉です。辞書には a second house; a cottage; a summer house などが出ていますが、「或る秋の午後」というのですから summer house は似合わないし、cottage というと「農家」のイメージが先に出てきます。country house は town house を持っている人の「田舎の邸宅」の感じです。また villa だけでは「別荘」とい

う意味にはならないと思います。ここは Mrs. O's country villa ぐらいにしておきます。

★「訪れたのであった」は、要するに「訪れた」のですから visited でもいいのですが、「(訪れた)のであった」に対して、少し軽いように思えます。「訪れたのであった」は「何か目的があってわざわざ訪れた」というニュアンスを含んでいるようです。went to visit…としました。

●「連体修飾節+特定体言」(小さな沼がそれを町から完全に隔離している, O夫人の別荘)

「小さな沼がそれを町から完全に隔離している, O夫人の別荘」は「連体修飾節(小さな沼がそれを町から完全に隔離している)+特定体言(O夫人の別荘)」ですから、英語では「特定名詞(Mrs. O's country villa)+コンマ関係詞節(, which a small marsh isolated from …)」と処理することになります。

■その別荘に達するには、池のまわりを迂回している一本の小径によるほかないので、その建物が沼に落としている影とともに、たえず私の目の先にありながら、私はなかなかそれに達することが出来なかった。(8301)

★「その別荘に達するには」は(in order) to reach[get to] the villa です。in order は to だけでは何となく弱いように感じたときに使います。なお、ここでは arrive at the villa は使わない方がいいです。arrive は汽車・バス・馬車などの場合とか、自力でも何となく努力を意識しない場合に使うのが普通だからです。

★「池のまわりを迂回している」は go round…でも間違いではありませんが、ここは次の文章との関係から、もう少し「迂回」という意味を強調して、skirt とか make [take] a detour around [round] …とか使いたいです。

★「一本の小径」は a path でもかまいませんが a narrow path としてもいいです。

●「連体修飾節+不定代名詞的体言」(池のまわりを迂回している一本の小径)

「池のまわりを迂回している一本の小径」は「連体修飾節(池のまわりを迂回している)+不定代名詞的体言(一本の小径)」ですから、英語では「名詞(a narrow path)+関係詞節(that make a detour round[around] the marsh)」となります。

★「(一本の小径)による)ほかない」はいろいろな言い方ができますが、ここではちょっと堅い言い方ですが be obliged to…を使って be obliged to follow[take[make] a detour round]] a narrow path とするか、日本語が「・・・による」なので rely on を使ってもいいでしょう。

●[ので](so と so that に関して)

[ので]は、普通、'…, so …'で対応することができるのですが、ここでは'…, so that …'を使いたくなります。so と so that 違いというのは非常に説明が難しいのですが、so は前後の二つの文章が等価の客観的な描写になり、so that の方は that 以下がかなり主観的な描写になるのです。したがって、たとえば、There was no direct path so I went round the marsh. の so を so that に代えると、自然に There was no direct path so that I had to go round the marsh.と言いたくなるのです。つまり、so を使った方は、結果として I went round という

行動面を述べている感じですが、so thatの方は、単に事実を述べているだけではなく、それ以上の要素が入ってくるような感じがします。非常に微妙な問題なのですが、so thatを使うと「(～のために)・・・せざるを得なかった」という気持ちが強まる感じです。したがって、so thatの代わりにwith the result that…という表現も使えるのです。

★「その建物」はthe buildingでしょう。

★「沼に落としている」の「・・・に落とす」はthrow on…でもいいですが、「落とす」という日本語に合わせるとcast onto…の方がいいでしょう。

★「(沼に落としている)影」ですが、ここは水に映った影ですからreflectionを使います。なお、「映像・影」の意味でshadow(e.g. The dog was barking at its own shadow on the water.)も使いますが、ここの「影」はreflection(e.g. the reflection of a tree in the water)でしょう。

●「連体修飾節＋不定代名詞的体言」(その建物が沼に落としている影)

「その建物が沼に落としている影」は「連体修飾節(その建物が沼に落としている)＋不定代名詞的体言(影)」ですから「名詞＋関係詞節」で処理します。the reflection (that) it cast onto the marshです。なお、reflectionにitsを付けると動詞が不要になります(its reflection on the marsh)。

★「とともに」はwithだけでは弱い感じなのでtogether withを使った方がいいと思います。

★「たえず」はconstantly(一定して)がいいですが、continuously(絶え間なく)でもいいでしょう。

★「私の目の先に(あり)」はbe in sightでもいいですが、「目の先」とは「近くに感じた」という意味でしょうからbefore my eyesの方が日本語に合います。なお、beforeの代わりにin front ofを使うと、文字通り、すぐ目の前にあるという感じがします。before my eyesはin front of my eyesとvisibleのちょうど中間にあたるような感じです。

●[ながら]

この場合の[ながら]はalthoughかthoughで表すしかないと思います。so that (al)though the building…です。

★なかなか・・・できなかった」はcould not reach it easilyでもいいですが、この日本文は全体的に堅く、妙に翻訳調なので、It was no easy matter to…とかI found it no easy matter to…とすれば、感じがよく出ると思います。